静岡県林地開発行為に係る森林造成指針

１　趣旨

林地開発許可では、開発行為をしようとする森林の区域に開発行為に係る事業の目的、態様、周辺における土地利用の実態等に応じて、相当面積を残置し、若しくは造成する森林又は緑地を適切に配置する必要がある。

林地開発地における森林の適切な配置・造成を行うための技術的助言として、本指針を定める。

２　目的

森林や緑地の造成は環境の著しい悪化を防ぐものであり、開発行為により生じた法面を植物で被覆し、表流水による浸食防止や凍上による表層崩壊の緩和等を期待して行うものである。具体的には、「防災機能の早期回復」「自然環境の早期回復」「周辺景観との調和」といった目的があげられる。

３　群落型の設定

緑化計画の検討にあたっては図-１を参考とし、現地の法面勾配、地質、周辺環境や気象条件に即した群落型を設定すること。また、緑化困難地については、表-１も参考とすること。

４　造成目標

緑化計画を検討するにあたっては、経済林を除き、以下の群落造成を目標とすること。

初期･･･施工後５～10 年で、表６のような先駆樹種を主体とする群落が成立

最終･･･施工地のほぼ全体に『事業区域及びその周辺の森林植生』が成立

５　基本方針

・造成森林は、原則植栽による

・硬岩切土面など、植栽が著しく困難な箇所においては、厚層基材吹付など、生育基盤の造成と併せた木本種子の吹付も認める。

・土石の採掘に係る許可のうち事業区域の周辺部 30mに含まれない残壁で、明らかに森林として成立が見込めない箇所は、「緑地」としての配置を検討する。

・土地の形質の変更（土石の採掘に係る最終残壁含む）が完了した区域は事業完了を待たずに順次緑化を行い、森林や景観の早期回復を図る

・「緑地」のうち、浸食を受けにくい立地条件（平坦地）である場合は、自

然侵入を促進する緑化基礎工の採用を認めるものとする。

６　導入植物

（１）天然生林に誘導する場合

①播種や苗木植栽による植生誘導

導入する植物は、周辺に自生している植物（外来種を除く）を選定することを原則とし、 表６に示す生理的特性に適合した導入植物を選定する。また、周囲の天然生林（種子の供給源）の有無により、先駆樹種の混入を検討する。

ア　天然生林がある場合：先駆樹種を主体とする。

イ　天然生林がない場合：先駆樹種を主体とし、遷移中後期種も１～２種程度選定する。

やむをえず外来種を用いる場合も、環境省において総合対策外来種に位置づけられている種については、使用を控えること。

②天然更新による植生誘導

市町村森林整備計画で天然更新が認められている区域であり、且つ浸食を受けにくい立地条件ならば、天然更新による植生誘導も認めることとし、事業期間内に植栽の猶予期間（造成完了後５年）を設けることができるものとする。

植生の誘導にあっては、自生していた木本類の根株（萌芽が期待できるものに限る）を残置する、自然侵入を促進する緑化基礎工等を施工する等の植生誘導のための基礎工や獣害防止対策、浸食防止対策を検討する。また、猶予期間終了時には「静岡県天然更新完了基準（平成 24 年 3 月 30 日付森計第 1082 号森林計画課長通知）」に準拠して調査を行い、天然更新調査野帳を完了届に添付して提出する。

なお、猶予期間を経過しても天然更新の完了基準を満たさない場合、一時的な林地開発許可地においては、可及的速やかに伐採前の植生に回復を図るという観点から更なる猶予期間は設けず、苗木植栽による緑化に変更し、施工するものとする。

（２）経済林に誘導する場合

生育可能な土壌がある、もしくは、客土や施肥によって生育可能な土壌が確保でき、植栽後も苗木の育成、管理が適切に実施できる立地である場合は、スギ・ヒノキなど市町村森林整備計画に基づく樹種による経済林への誘導も選定することができるものとする。

７　森林の造成手法

（１）基礎工

緑化基礎工は、主として土木的な手段により生育基盤の安定や改善を図るためのものである。緑化基礎工の工種を役割別に掲げると、次のとおりである。

ア．生育基盤の安定化を目的とする工種
　柵工、筋工、法枠工、伏工、排水工など

イ．生育基盤の造成と改善を目的とする工種
　客土工（埋土種子を含む表土の活用を含む）、厚層基材吹付工、緑化マット工など

ウ．気象条件の緩和を目的とする工種
　伏工、網張工、防風工など

・森林の造成対象地の土壌状況と植栽等を行う樹木等の高さや特性（適応地）から、客土（造成基盤）の必要性と厚さ（表２参照）、必要工種について検討する。
・造成基盤と造成対象地の土壌が、極端に性質が異ならないよう、十分に注意する。
・採石跡地などの緑化困難地では、開発時に生じる表土を仮置きし、造成森林とする小段等に順次客土として用いることも検討する。（緑化基礎工が効率的かつ経済的に実施できる。）

表２　植栽樹木の種類と客土（造成基盤）の必要厚さ

樹高(m)		樹木 3m 以下	草本類
客土厚(cm)	上層	30～40	20～30
	下層	20～30	10 以上
(注)上層とは、養分や腐植を十分に含んでいる土層、下層とは、腐植等は少ないが、根が伸びることができる土層（おおむね土壌硬度が 23mm 以下）			

（２）植栽工

①適用

・小段部及び平坦部は、植栽による森林造成を原則とする。
・法面については、現地勾配・地質等を勘案した上で、植栽工の採用を検する。なお、確実な成林を図るためには、法面勾配が 30°以下であることが望ましい。

②配植方法

配植は、審査基準に基づき対象箇所内に植栽木が均等に分布するよう計画

する。

③植栽本数

ｈａあたりの植栽本数は審査基準に基づき決定するが、災害のおそれがなく、植栽後も苗木の育成、管理が適切に実施できる立地である場合は、市町村森林整備計画に記載されている植栽本数を採用することも可能とする。

④苗木の取り扱い

・苗木の大きさは審査基準を原則とするが、市場で一般的に流通し、植栽地域での生育に支障のない苗木であれば使用できるものとする。

・植栽地に苗木を運搬するときは、なるべく１日の植付け可能本数を小運搬し、到着後ただちに乾燥を防ぐ措置を行うこととする。

⑤留意点

・岩石地等透水性の悪い地盤に植え穴を掘る場合には、排水不良による根腐れや、水の集中による斜面崩壊等を誘発しないよう、十分配慮する。

・シカ等獣害により植栽木の生育に支障が生じる恐れがある場合は、被害防止対策を実施する。

（３）吹付工

①適用

・現地勾配・地質等を勘案した上で、植栽工が不適と検討された部分については、吹付工を実施する。

・吹付工による森林の造成を行う場合、吹付方法、発生期待本数と播種量は④のとおりとする。

②吹付方法

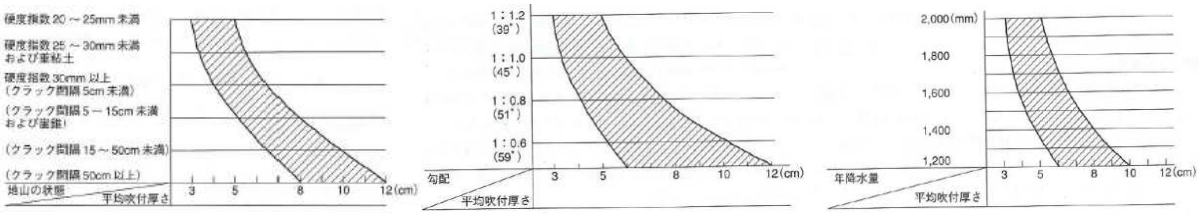
表３を参考に、地山の状態、導入植物の特性（適応土壌、種子形状）などから、客土吹付工、厚層基材吹付工など工法の選定と、植生基盤の造成および金網張工、溝切工といった緑化基礎工の施工による安定化の必要性を検討する。検討には、岩質や風化・亀裂の程度、種子形状などの点に十分留意する。

表３　工法検討の条件

工法	種子の大きさ		風化の程度		亀裂間隔		土壌の硬さ		侵食の影響	
	大	小	全面的	部分的	10cm未満	10cm以上	硬	軟	受けやすい斜面	受けにくい斜面
客土吹付工		○	○		○		○*	○		○
厚層基材吹付工	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
* 硬岩の場合は、植生基盤の造成および緑化基礎工の併用による施工の可否を判断する。										

③吹付厚

客土吹付工、厚層基材吹付工の吹付厚は、地山の状態、降水量、勾配から図２を参考に決定する。



地山と吹付厚　　**降水量と吹付厚**　　**勾配と吹付厚**

図２　吹付厚の検討目安

④発生期待本数

- 吹付工に使用する木本・草本植物は、木本植物（低木含む）３～５種、草本植物１～２種を目安に選定する。
- 木本植物の発生期待本数は、全体で概ね 100 本／㎡を目安とする。
- 草本植物の発生期待本数は、繁茂しすぎると木本植物が被圧されるため、概ね 150 本／㎡を目安とする。
- 播種量は表４の式により算出する。なお、Ｂ、Ｃ、Ｄについては、表４を標準とし、現場条件に応じて、道路土工指針−切土・斜面安定工指針−第 8 章のり面保護工 8-3-5(2)選定工法の設計 1）播種量の設計を参考に定める。

表４　播種量計算式

$$\text{播種量} = \frac{A}{B \times C \times D \times E \times F \times G}$$

Ａ：発生期待本数(本/㎡)
Ｂ：吹付厚の補正率(1.0) Ｃ：立地条件の補正率(0.9)
Ｄ：施工時期の補正率(1.0)　Ｅ：種子の発芽率
Ｆ：種子の単位粒数（粒/ｇ）　Ｇ：種子の純度

⑤留意点

植物の定着や侵入促進のため、以下の点に留意すること。

- 残壁の勾配は可能な限り緩勾配にする。
- 極力平滑にせず、安全上問題がない程度に凹凸を残す。

８　施工時期

（１）植栽工

植栽工は以下を施工適期とする。

・常緑針葉樹：２月上旬～４月中旬又は９月下旬～12 月中旬
（マツ類は２月中）

・常緑広葉樹：３月上旬～４月下旬、９月中旬～10 月下旬

・落葉広葉樹：２月下旬～４月上旬、10 月中旬～12 月中旬

（２）吹付工・法面保護工

吹付工や植生マット工等法面保護工に伴う播種工は、以下を施工適期とする。

・春夏期施工　日平均気温が摂氏 10～25℃の期間

・秋期施工　　日平均気温が摂氏 15～25℃の期間

９　開発完了後の造成森林の管理目標

確実な森林の造成のため、以下の項目を目標として維持管理に努めること。

（１）植栽工

・苗木植栽から半年後の活着率が、８割以上であること。

・植栽木が草本植物やクズ等に被圧されないよう下刈等を行うこと。

・植栽木がシカ等による食害を受けていることを確認した場合は、被害防止対策を行うこと。

（２）吹付工・法面保護工

・施工から半年後の植被率が、目視で５割以上であること。

・施工後２～３年後、導入した木本植物が、目視で１本／㎡以上の割合で確認できること。

（３）その他

・採用した工法で造成目標が達成できない場合は、施工方法の見直しや、緑化基礎工の併用を検討する。

・上記の割合や数値を満たしていない、あるいは基盤材が浸食・流亡している場合は、補植や再施工を検討すること。

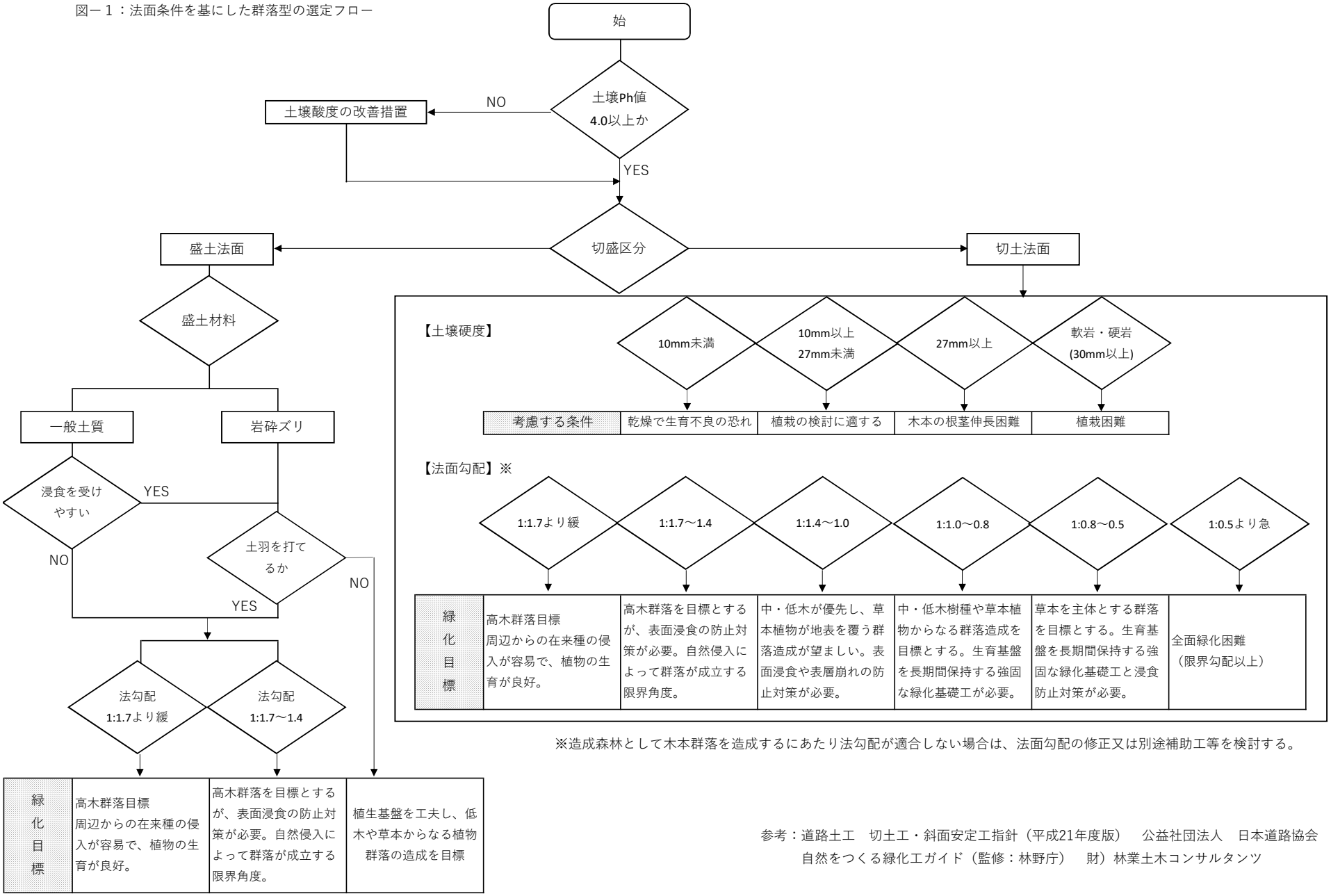
（参考文献）

「道路土光－切土工・斜面安定工指針（平成 21 年度版）」
公益社団法人　日本道路協会
「自然をつくる緑化工ガイド」
林野庁監修・財団法人林業土木コンサルタンツ

附則

この指針は、令和８年４月１日以降の申請から適用する。

図ー１：法面条件を基にした群落型の選定フロー



※造成森林として木本群落を造成するにあたり法勾配が適合しない場合は、法面勾配の修正又は別途補助工等を検討する。

参考：道路土工　切土工・斜面安定工指針（平成21年度版）　公益社団法人　日本道路協会
自然をつくる緑化工ガイド（監修：林野庁）　財）林業土木コンサルタンツ

表－１　緑化困難地の施工事例

※太字は、環境省が産業又は公益的役割において、重要と位置付けている「産業管理外来種」である。緑化植物については、環境省・農林水産省・国土交通省が編纂した「外来種被害防止行動計画」において、国・民間団体が提示している緑化指針を踏まえた管理・利用を徹底することとされている。なお、（）書きは総合対策外来種に位置づけられているため、なるべく使用を控えること。

緑化困難事例		硬質土壌地	火山性特殊崩壊地（スコリア）	海岸地（風衝地）	急傾斜地	無土壌岩石地
概要		植物の根系が進入できない締まった土壌。緊密な粘性土で23mm、粒子の粗い砂質土で25mm以上の土壌硬度を示す。	火山噴出物は比重が軽いことが多いため、わずかな地表流でもガリの発達や浸食・崩壊が起こり、植生の生育基盤や植生自体を破壊・流亡させる。	継続的な強風によって、植物体に倒伏や枝幹の折損などの物理的な障害、過蒸散や乾燥などの生理的な障害が発生する。また、生育基盤の乾燥や土壌形成の阻害など間接的な障害も生じる。	基盤が固く、表土が乏しい。また、斜面が急になるほど土壌、養分、水分の流亡が生じやすくなり、植物の生育が衰えやすい。	急傾斜、硬質、基盤の不安定、養分が乏しいなど植物の成立や生育にとって過酷な条件がそろっており、緑化工の実施に当たっては、それら条件を改善できる工種の選定や植物の導入を行う必要がある。
緑化の困難要因		・急勾配の切土になりやすく、生育基盤が不安定。 ・含水すると土層が膨軟になり浸食を受けやすい。 ・乾湿の繰返しにより表層土が風化剥落し、植生が定着しにくい。 ・植物の根系が発達しにくい。	・法面の安定性が乏しい。 ・養分が乏しく、理化学性が不良 ・大面積の荒廃地では、種子の供給源が乏しく、植生遷移の進行が遅い。	・風による直接的な物理的障害や生理的障害のほか、基盤条件の変化による間接的な生育障害を受ける。 （倒伏、枝幹の枯損、枝葉の摩擦衝撃、樹皮の摩耗、過蒸散、乾燥、低温による活力低下、腐植形成の障害等）	・傾斜が急になるほど生育基盤が不安定になり、客土などの崩落が増加する。 ・植物の生育不良が生じやすい、また、根系の発達が劣り、土壌緊縛力が低くなる。 ・植物の自然侵入が少なくなる。	・生育基盤が固いため、土壌中への根系の侵入が困難で植生の生育が不良。 ・切土法面については、斜面が急勾配になることが多い。 ・生育基盤の造成は、植物の良好な生育の確保と耐浸食性を両立しなければならず、労力と費用がかかる。
緑化基本方針		・生育基盤や風化土層の固定を図るための緑化基礎工を配置し、植生工を行う。 ・客土等により良好な生育基盤を造成する。 ・含水による風化を防止するため、法肩や法面の排水工を設置する。	・初期における雨裂浸食（リル）の発生を防止するため、地表流下水の処理を考えた緑化基礎工を配置するとともに、早急に全面的な緑化を図る。 ・養分の供給をしっかり行う	・草本単体等の単純な群落よりも、立体的な木本群落や種構成の多い複雑な群落を目指す。 ・植物は土壌を改善する機能の高い先駆樹種を積極的に用い、成立密度を高くする。 ・防風工等風衝による障害軽減対策を行い、適期に植栽する。	・傾斜が60度以上の急斜面を作らないよう検討する。 ・緑化に当たっては、斜面の安定、生育基盤の安定を図るための緑化基礎工を配置する。 ・使用する植物は、急傾斜でも衰退し難く根系の発達が良い木本植物を主体とする。	・傾斜が60度以上の急斜面を作らないよう検討する。 ・緑化に当たっては、倒れにくい形態の樹木の選定、群落の形成を計画する。 ・植物の生育が確保できる生育基盤を造成する。また、造成した生育基盤を長期保持できる基礎工を検討する。
設計・施工上の留意点	緑化目標	・単純な草本群落は衰退が早く、斜面の不安定化につながるので避ける。 ・急傾斜地では、樹高の高い群落は倒伏しやすく不安定となるので、樹高の低い群落の形成を目指す。	・ぢ条を改善する効果の高い先駆樹種を主体に低木林又は高木林を造成する。 ・長期的には、周辺の植生と同様な種類による群落の形成を目指す。	・主構成種、補全種、草本種が混生する群落を目指す。	・斜面安定に好ましい低木群落を標準とする。 ・表土層や風化土層の滑落を防止するため、傾斜が急になるほど目標群落の樹高を低くする。	・単純な草本群落は衰退しやすいので避ける。 ・先駆樹種を選定し、緩傾斜では低、高木を、急傾斜の場合は低木層による群落形成を計画する。
	適応植物例※（外来種）	**ﾄｰﾙﾌｪｽｸ**、ｸﾘｰﾋﾟﾝｸﾞﾚｯﾄﾞﾌｪｽｸ、ﾎﾜｲﾄｸﾛｰﾊﾞｰ、（ｲﾀﾁﾊｷﾞ）	ﾎﾜｲﾄｸﾛｰﾊﾞｰ、（ｳｨｰﾋﾟﾝｸﾞﾗﾌﾞｸﾞﾗｽ）、ﾊﾞﾐｭｰﾀﾞｸﾞﾗｽ、**ﾄｰﾙﾌｪｽｸ、ｵｰﾁｬｰﾄﾞｸﾞﾗｽ**、ｸﾘｰﾋﾟﾝｸﾞﾚｯﾄﾞﾌｪｽｸ	（ｲﾀﾁﾊｷﾞ）	**ﾄｰﾙﾌｪｽｸ**、ｸﾘｰﾋﾟﾝｸﾞﾚｯﾄﾞﾌｪｽｸ、（ｳｨｰﾋﾟﾝｸﾞﾗﾌﾞｸﾞﾗｽ）、ﾊﾞﾐｭｰﾀﾞｸﾞﾗｽ	ﾎﾜｲﾄｸﾛｰﾊﾞｰ、（ｳｨｰﾋﾟﾝｸﾞﾗﾌﾞｸﾞﾗｽ）、ﾊﾞﾐｭｰﾀﾞｸﾞﾗｽ、**ﾄｰﾙﾌｪｽｸ**、ﾊﾞﾋｱｸﾞﾗｽ、ｸﾘｰﾋﾟﾝｸﾞﾚｯﾄﾞﾌｪｽｸ
	適応植物例（在来種）	草本：ﾒﾄﾞﾊｷﾞ、ｽｽｷ、ﾖﾓｷﾞ 木本：ﾏﾂ、ｱｶﾒｶﾞｼﾜ、ｸｻｷﾞ、ｳﾂｷﾞ、ﾇﾙﾃﾞ、ﾔﾏﾊﾝﾉｷ、ﾔｼｬﾌﾞｼ、ﾔﾏﾊｷﾞ	草本：ﾒﾄﾞﾊｷﾞ、ｽｽｷ、ﾖﾓｷﾞ、ｲﾀﾄﾞﾘ 木本：ﾘｮｳﾌﾞ、ﾔﾏﾊﾝﾉｷ、ﾔｼｬﾌﾞｼ	海岸：ｸﾛﾏﾂ、ﾔﾏﾊｷﾞ、ﾒﾄﾞﾊｷﾞ、ｱｷｸﾞﾐ、ｴﾆｼﾀﾞ 山岳：ﾔﾏﾊﾝﾉｷ、ﾐﾔﾏﾊﾝﾉｷ、ﾔｼｬﾌﾞｼ、ﾋﾒﾔｼｬﾌﾞｼ、ｼﾗｶﾝﾊﾞ、ﾀﾞｹｶﾝﾊﾞ、ﾔﾅｷﾞ類	草本：ﾒﾄﾞﾊｷﾞ、ｽｽｷ、ｲﾀﾄﾞﾘ、ｲﾜﾉｶﾞﾘﾔｽ、ﾋﾒﾉｶﾞﾘﾔｽ 木本：ｱｶﾏﾂ、ﾔｼｬﾌﾞｼ、ﾈﾑﾉｷ、ｱｶﾒｶﾞｼﾜ、ﾀﾆｳﾂｷﾞ、ｳﾂｷﾞ、ﾔﾏﾊｷﾞ、ｺﾏﾂﾅｷﾞ、ﾔﾅｷﾞ類、ﾘｮｳﾌﾞ	草本：ﾒﾄﾞﾊｷﾞ、ｽｽｷ、ｲﾀﾄﾞﾘ、ﾖﾓｷﾞ 木本：ｱｶﾏﾂ、ﾔｼｬﾌﾞｼ、ﾀﾆｳﾂｷﾞ、ｸｻｷﾞ、ﾇﾙﾃﾞ、ｱｶﾒｶﾞｼﾜ、ｳﾂｷﾞ、ﾔﾅｷﾞ類
	緑化基礎工	軽量法枠工、金網は履行、吹付法枠工、排水工等	表土の安定、浸食防止、地表流下水の処理を目的とした、柵工、筋工等	風速を弱めるための防風工、防風柵、防風ネットﾏﾙﾁﾝｸﾞ、伏工による乾燥防止、客土等	・法勾配を60度以下になるよう修正し、なるべく緩勾配にする。 ・長大な法面にならないよう階段工を設ける。 ・傾斜が45度以上の斜面では、表層土の長期安定のため、法枠工や金網張工などの緑化基礎工を設置する。	・法勾配を60度以下になるよう修正し、なるべく緩勾配にする。 ・緩傾斜の場合は、客土工により生育基盤を確保する。ただし、平坦地や階段部は滞水しやすいので、排水処理を確実に行う。 ・急傾斜の場合は、溝切工、法枠工、金網張工などを設置する。 ・採石地等は、最終残壁面となったらただちに緑化に着手し、緑化を後回しにしないこと。
	植生工	客土を用いる工種、耐浸食性に優れた工種を採用する。 ●客土吹付工、厚層基材吹付工、植生マット工、（植穴を掘り、客土する）植栽工	有機質の土壌改良材を投入できる工種の選択、急速緑化が可能な甲種により、表土の浸食を防止する ●客土吹付工、植生マット工等	植生工のみの単独施工では、植生導入は困難である。緑化基礎工と植生工の組み合わせを基本とする。 ●防風工＋植栽工＋客土工＋施肥	・傾斜が急になるほど、面的な施工方式による基材吹付工を優先させる。	・播種に併せ、厚みのある生育基盤が造成できる工種を選定する。 ・傾斜が急になるほど、面的な施工方式による基材吹付工を優先させ、播種工を優先とする。
	植生管理工	追肥、追播種、つる性植物の除去		追肥、追播種、補植、防風対策工の補修	追肥・追播種 衰退しやすいので、定期点検を実施	追肥・追播種 衰退しやすいので、定期点検を実施

表６ 導入可能種生育特性一覧表

形態ほか			種名	高さ(m)	適応地（摘要）	生理的特性				調達難易度		発生期待本数の目安	平均粒数	平均発芽率	純度	種子の大きさ
						耐乾	耐痩地	耐寒	耐暑	苗木	種子	本/㎡	粒/g (粒/kg)	%	%	
木本植物	先駆樹種	高木	アカマツ	30～35	乾燥した土壌に強い	○	○			○	○	～20	110	60		小
			アカメガシワ	10～15	耐痩地が大、成長が早い		○		○	×	△	～40	50	75	100	小
			ヌルデ	5～10	耐痩地・耐乾性が大、成長が早い	○	○	○	○	△	△	～50	90	70	100	小
			ヤマハゼ	5～10	向陽の肥沃深層の土壌を好む	○			○	△	△	～70	23	30		大
			ヤシャブシ	7～20	耐痩地、耐乾性が大、岩石地でも育つ	○	○			○	○	～60	900	40	85	小
			オオバヤシャブシ	5～10		○	○		○	―	×	～60	1,300	7		小
			ヤマハンノキ	10～17	耐痩地、耐乾性が大	○	○			○	○	～60	1,400	40		小
			ヤマモモ	5～15	痩せ地に強い	○	○		○	○	△	～10	(6,000)	55		大
			リョウブ	3～10	土地を選ばない	○	○		○	△	×	～50	14,000	20		小
		低木	ヤマハギ	2～3	硬質地でも生育する、成長が早い	○	○		○	○	○	～60	130	70	90	小
	遷移中後期樹種	高木	アラカシ	10～20	暖地の深層肥沃の土壌を好む		○			○	△	～10	(1,000)	75		大
			シラカシ	20～25	深層肥沃の土壌を好む			○		○	△	～10	(950)	55	100	大
			コナラ	15～20	肥沃の深層土を好む	○				○	△	～10	(860)	60		大
			ムクノキ	15～20	土性を選ばない				○	○	×	～50	(5,700)	10～60		大
			クスノキ	10～35	一般に土性を選ばない				○	○	△	～10	(9,500)	80		大
			タブノキ	10～20	肥沃適潤の深層土に適する				○	○	△	～30	(2,400)	70		大
			ヤマザクラ	20～25	肥沃の深層土で向陽地を好む	○		○	○	○	△	～30	15	70	100	大
		低木	ヒサカキ	2～5	土質は選ばない	○			○	○	△	～50	1300	30		小
草本植物			ススキ	0.8～2		○	○	○	○	―	○	～100	2,000	～100	90	小
			イタドリ	0.5～1.5		○	○	○		―	○	～100	800	～100	85	小
			メドハギ	0.5～1.0		○	○	○	○	―	○	～20	600	～20	95	小
			ヨモギ	0.5～1.5		○	○	○	○	―	○	～50	3,000	～50	85	小
ツル植物（参考）			ツタ（ナツヅタ）	－						○	―					
			イタビカズラ	－						△	―					
			オオイタビ	－						○	―					

注)H16とH21の緑化施業地の調査において出現頻度の高かった樹種を基本として導入可能種を選定した。
注)平均粒数、発芽率、純度は参考値で、使用する種子の値で播種量を計算する。
注)ツル植物は勾配が急な法面への植栽用として掲載する。
注)苗木の調達難易度は建設物価より引用又は種苗会社からの聞き取りによる（高木樹種はH=0.5m以上の苗木について、その他は規格なし)。
○：普通,　△：やや困難又は早めの手配必要,　×：困難,　―：不明・対象外
注)種子の調達難易度は種苗会社からの聞き取りによる。　○：普通　△：早めの手配必要　×：困難,　―：不明・対象外
参考）森本幸裕・小林達明(2007)最新環境緑化工学.朝倉書店、林野庁(1997)自然をつくる緑化工ガイド.林業土木コンサルタンツ